

チーム再建への時間と人が足りなかった

第38期 鈴木辰夫

1.昭和55年秋

10月の全国大会の予選が終り、敗戦のショックが覚めやらないままに、38期の6名に代がバトンタッチされた。新チームは鈴木をチームリーダー兼バックスリーダーに、野島をフォワードリーダーに置き、神保、中村には野島のサポートを高山、妻島には鈴木をサポートをしてもらい、チームの再建に取り組んだ。

しかしながら……。我々38期も、部員数は少なく、入部当時から7、8名程度の人数であった。その間にも何名かの入部があったが、体力的、精神的?理由で最後まで残ったのは6名であった。悪いことは続くもので、入部当時15名いた39期の後輩達も、せっかくの夏合宿を乗り切ったのに、半分以下に部員数が減ってしまい、結局、昨年以上に15名を満たない部員数で活動をスタートせざるを得ない状態になっていた。

2.昭和55年冬

本当に厳しい時代であった。部員が少ない為、来年の新人が入学するまでは対外試合はほとんど出来なかった。全員で、以前退部した者やクラブ活動をしていない者を誘ったが……。失敗。

普通、この状態ではチームの雰囲気も腐りがちになるものだが、そこは先輩が築きあげたチームワークと残った後輩達の我々への熱い信頼感が土台となり、明るい明日に向かって、日々練習に励んだ。幸いにも、残った部員の個々の体力については、生き残っただけあって、見

劣りする事もなく、たまにOBの方をお願いして対外試合を行った時でも、そんなに負けなかった。(OBがすぐ上手であった事も多大にあるが)

3.昭和56年春

待望の新生が入学してきた。“部員を15名以上に” ために、自分達の出身中学を中心に怒濤の様な勧誘を行い、5月の時点で20名以上の総部員数になった。又新入部員(40期)には、重量級の部員や足だけは速い者など、どこかでキラリと光るものを持っている部員が多く、チームもより明るい雰囲気になった。しかし、この1年生から4、5名を即試合に出さなければならぬ状況なので、春は徹底的に新入部員中心の基礎練習の積み重ねに終わってしまい、関東大会は、1回戦にて敗退してしまった。

4.昭和56年夏

昨年から合宿も菅平に移り、8月上旬の6日間、菅谷先輩達の指導のもとで、春の基礎練習を踏まえ、急ピッチでチームのコンビネーション作りに取り組んだ。

ところが、それまで怪我人が全くいなかったのに、この大切な夏の強化時期に故障者が続出してしまった。3年生でも中村が腰痛でアウト、鈴木が指の脱臼となり、野島、神保、高山、妻島が中心となってチームを引っ張る事になる。試合についてもOB戦を中心に、実践的な場面を想定しての練習ゲームになった。

5.昭和56年秋(全国大会予選終了まで)

夏合宿を終了し、部員個人のパワーもかなりレベルアップして、故障者も復帰してきた。しかしその頃はすでに、本戦があと1ヶ月を切っていた。チームとしては、組織プレーが不十分であり、新チーム以来、ゲーム経験が少なかったため、残された期間、練習試合(松原高校、千歳ヶ丘高校、足立西高校)を行い、実践での経験を養う事に専念した。しかしながら、チーム作りが遅れた為に、サインプレー(スクラムサイド、FBのライン参加、ペナルティーからの攻撃等)が完成できず、結局、個人の力の連続プレーによる単調なチームになってしまった。あせる気持ちとは裏腹に時間だけが経過してしまい、ついに全国大会1回戦(豊多摩高校)に臨むことになってしまった。結果は健闘むなしく……。

我々38期の代は10月を迎えることなく終わった。

6.あれから現在にいたり

ある意味で他の先輩より短い期間の代だったかもしれない。同期と話をして、不思議と話題は1、2年生の事が多い。心のどこかに、チームの再建が出来なかった悔しい思いがあるからだと思う。

しかし卒業して10年以上たっても、同期や先輩、後輩と会って楽しく過ごせるのは、その悔しい思い以上の何か熱い思い出を持っていたからであると確信している。